kubotatu

look for the 21st century hero and cross America on a motorcycle!

くぼたつアメリカ大陸横断録 ③

21世紀のヒーローを求めて

「作られたヒーローなんてもういらないよ。
そんなことよりもね、“なにやろうかな”って
ワクワクしてるやつが、何年か後にキーウエストか
なんかにいるんじゃないかと思うよ」

エルパソでヤマハの熟年・本格派ライダー松本さんと落ち合った。アメリカ大陸横断は彼の夢だったから、「行かせないならやめる」って会社に言って本当に来ちゃった。

松本さんと大陸の真ん中を何千キロも走ってフロリダビーチにたどり着いた。感動したね。大西洋がド

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

「アメリカ大陸を横断する3つの方法」
the three keys to cross America

アメリカ大陸横断をやったことでみんなからたくさんのメールをもらったけど、その中で一番多い言葉は「うらやましい。なんでおまえは行けるの。どうやれば行けるの」なのね。だから、「アメリカ大陸を横断する方法」っていうのを簡単に言っておこうと思う。

まず『モバイル』。みんな「行きたいけど仕事があるから行けない」って言う。じゃあ、仕事が続けられればいいのねっていうのが1つの回答。モバイルができれば7、8割の仕事は止めなくて済む。でも、モバイルを簡単に考えてもらっては困る。日本でつなげられるなんてのはモバイルとは言えない。アメリカは回線の状況がまちまち。それに対応できる技術や知恵がないとだめ。

たとえば、ホテルからつなぐ場合は部屋のマニュアルを読んで「9,」や「0,」を入れる。モジュラージャックがなければフロントへ行ってFAXを借りる。FAXならコネクターを差し込めるからね。その時は「フロントの人といかに仲良くなるか」がポイントだね。「仕事だ、貸せ」って言っても絶対貸してくれない。どれだけおもしろいことが言えるかなんだよ。たとえば、フロントの女性に「あなたが好きな男優はだれ」と聞く。「これつなげると見られるんだよ。仕事でつなげたいからついでに見せてあげるよ」とか言うと、「おもしろそう。どうぞ」ってことになる。オヤジだったら「プレイボーイ見たい？」でOK。そういうことがモバイルなんだよ。それから、どうしても電話回線がないときのために携帯電話を用意しておきたいね。で、モバイルができないときは携帯で日本に電話をかけちゃう。

2番目が『体力』。早い話、一日1時間歩けってこと。走ると関節や膝をやられるから、プロは絶対に速く走らない。歩くよりちょっと速い程度、1キロ8分くらいのペースで走る。素人は走っちゃうでしょ。そうすると苦しくて終わるから、次に走るのがいやになる。だけど、ゆっくり走っているとランニングハイに入る。脳内にエンドルフィンが出てきて気持ちよさの最高の状態になる。それで終わるからやみつきになるわけ。それから、下はアスファルトだから、だいたい1万円以上のジョギングシューズじゃないと絶対だめね。

お勧めは「通勤ラン」。会社に行くときに1つ手前の駅で降りて歩いて行く。行きも帰りもそうすと、1日に2駅歩くことになるよね。なるべく楽しくなるように歩く。絶対にトレーニングと思っちゃいけない。よりみちもOK。雨の日も休まず歩く。それを生活の習慣にしちゃう。楽しいと思ってきたら自然に2駅前で降りるようになるから。そのうちに歩くことで体が作られてきて、循環機能や心肺機能が強くなる。ここまできたら、「絶対に速く走らない」と誓って前に進む。そうすると、すごくいいフォームで走るようになるよ。できれば、1年後にフルマラソン参加を決めるんだよ。お勧めは海外。日本のマラソンは人を押しのけて陸上部みたいに走るからいやーな思いをするのね。海外のはボランタリーだし、覆面してるわ、バニーガールいるわですごく楽しい。海外旅行を兼ねて1年後にごほうびとして行く。そうすると目的があるから続けられる。

3番目は『英語』。ホテルを探す、電話回線のことを交渉する。ありとあらゆることが英語できないと時間くってしょうがない。でも、優先順位は一番下だね。英語よりも重要なのは笑顔なんだよ。むこうは日本人が怖い。だから「ハーイ」でもいいから、笑顔で言うとみんなほっとする。それでコミュニケーションがとれるでしょ。

基本はこの3つだね。で、バイクでアメリカ大陸横断をしたいならもう一度教習所へ行ったほうがいい。バイクのテクは自己流じゃだめ。向こうの天候には通用しない。竜巻あるよ。横殴りの雷いるよ。ハイウエイにバーストしたチューブなんてのは何百もあるから。日本の環境なんて甘くてなんの参考にもなんない。それから、壊れたときのために一旦バラバラにしてまた組み立てられるくらいできたほうがいいね。

強いていえば、もう1つ『目的意識』だね。バイクで長旅をしたいってだけだときつい。仕事をやめたい、休みたいって理由もきつい。それじゃ逃げだから。逃げて冒険に行くともっと厳しい社会が待ってる。旅っていうのは鍛えに行くことなんだってこと。今回オレには「21世紀を見極めたい」みたいな気持ちがあって、それが旅を支えてくれた。ポリシーとか、大きな目的とか、夢、そういうのをちゃんと持ってないとめげちゃうと思うよ。

アメリカで困ったときは笑顔がポイント（上）
厳しい荒野を旅するには体力が必須（下）

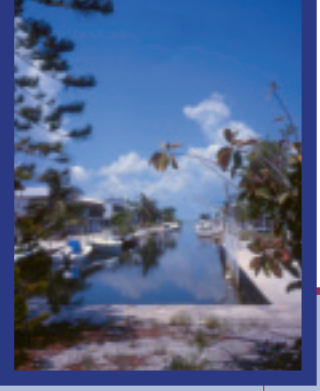
「マイアミビーチを濡らした雨男の涙」
you bring rain whenever you come!

バーンってあるわけさ。浜辺も最高。白いパウダー状の砂がぐっと詰まってるから、車も走れる。みんなバギーなんかを飛ばしてる。ビーチで「記念撮影！」とか言ってたら、サングラスかけた2人連れの金髪美女が来た。「一か八かで写真撮っていいですかって言うべきだよね。松本さんお願い」というわけで彼が頼んだら二つ返事でOK。すばらしい美形なんだけど、サングラスを取ったら40歳くらいなのよ。鍛えてるんだね。これがオレの夢だったんだよ！

それからキーウエスト目指して一路南下したんだけど、松本さんに許された時間はあと4日。それまでに会社に復帰しないとクビになる。本当はバイク乗りなら一番下のキーウエストまで行きたいのね。その日も雨。松本さんと落ち合ったエルパソからずっと雨だった。「お前は雨男に違いない」「あんたこそ」「そのうちはっきりするさ」とか言いながら、すごい雨の中やっとマイアミまでたどり着いた。で、天気予報を見たら台風が3つも来てる。そんなわけで、松本さん、6000キロ走ってきてたった162マイル手前で泣く泣く断念。海を見て、男泣きしながら、実は就職を心配しながら帰って行った。

一方、オレはキーウエストに向かったわけ。そしらた晴れた。松本さんは大嵐のなかアトランタに向けて一人旅。つまりあいつの上だけ雨が降ってたってこと。オレは雨男が去ってからというもの、快晴のフロリダビーチを大満喫。

インターネット・マガジン 株式会社インプレスR&D
Copyright © 1999 Impress R&D



天国へ続くセブンマイルズ・ブリッジ（上）
ビリオネアーの自家用車はクルーザー（右）

トンネルをくぐり抜けてマンハッタン島が見えたときには熱いものがあったね。目の前にエンパイヤーステートビルがあって、そこを歩いてる奴らを見てたら、涙がにじんできちゃって。なんでかっていうと、観光客とビジネスマンがだれきってるように見えるのね。目が死んだ魚。危険と隣り合わせに生活してきた人間が危険を忘れた奴を見るとだれてるように見える。そう思いながら、新宿育ちの自分も実は都会に

「キーウエストは金持ちたちのゴールだった」
billionaires are enjoying a life in retirement

夢のキーウエストに着いた。街中は観光地みたいであんまり好きじゃない。キーウエストはクルージングするとこなんだよ。リゾート。釣りとか、ジェットスキーとかやるのがいい。ビーチはほんの一部で、だだっ広くて遠浅ですばらしいけど、人はそういうとこ行かない。コバルトブルーの海だからね。街を観光するんじゃなくてクルージングとか、ヨットとかをやる。

バイク乗りのオレとしても、街じゃなくてセブンマイルズ・ブリッジが最高。白い道がセブンマイルどころか100マイルくらい続いてる。両脇はコバルトブルーの海に青い空、その中を白い道が1本びーっと貫く。そこをひたすら何時間も走る。ライダーハイになるね。だんだん錯覚してきて飛んでるように思えてくる。グライダーで滑走してるような感じで、風の谷のナウシカ状態になる。風の音しかしない。そういうのがいいんだよ。

途中にはクルーザーやホテルやコテージがあったり、別荘があったりする。観光で行ってもそういうとこには降りられないじゃん。だけど、バイクの一人旅のよさっていうのは、行ってみようっていうのが簡単だってこと。で、行ってみて初めてわかったね、こういうリタイヤライフってのがあるんだって。移動手段は車じゃなくて全部船だね。みんな悠々自適。ガレージに止まってるのはたいていポルシェかフェラーリのオープンカーだよ。で、クルーザーがあって、釣り道具が置いてある。そういう生活をしてるんだね。彼らはキーウエストを本当に堪能してる。

彼らのサクセスストーリーって明快で、なんで働くのかがはっきりしてる。こういうところで余生を過ごしたいから働く。日本人にはないじゃん。どうやって老後を過ごすかみたいなことは誰も真剣に考えてない。強いて言うとコンビニのそばがいいくらいだよね。あれじゃ働く気になんないでしょう。働くことが美徳なんてうそだよね。その点、彼らははっきりしてる。

フロリダビーチってのは一番下から上まで1000キロの間にいろんなビーチがいっぱいあるんだけど、そこには金持ちがびっしり埋まってる。3日間走ってて金持ちの家がずーっと続いてんだよ。それ見たら戦意喪失したね。本当にあれはまいった。物質文化が終わりだとかなんとかって言ってるけど、あれ見るとやっぱり金儲けして豪邸に住んで、悠々自適に暮らすぞってほうがはっきりしてていいや。日本で金持ちっていっても、官僚が逮捕されたり、社長が逮捕されたり、夢も希望もないじゃない。税金で取られたり、妬まれたりして幸せな金持ちいないし。むこうは、1000キロずらーっと金持ち。

「漂う天空の島“アメリア・アイランド”」
the purest white of the sky island

A1Aを走ってアトランタビーチで迷った。わかんないままある桟橋からフェリーに乗ったら、そこでアメリア・アイランドを発見！　海の真ん中から白い陸がうっすらと出てんだよ。海抜ゼロって感じで、真っ白い塩の色で光り輝いてる。絶対あそこに行こうと思った。フェリーを降りて3時間くらい走ってたらアメリア・アイランドの近くに出てきた。1泊20ドルのカギも窓もない牢屋みたいなやばそうなドライブインに泊まった。サーファーだとか、なんだかわけわかんないやつがいっぱいいたね。まぁいいやつうんで、とりあえずビーチ沿いまで行って散歩してた。ふと海のほうを見たら、ビルぐらいの高さの水が壁になってやってきてんの。いわゆる「ビッグウェンズデイ」、津波だよ。いま思い出すと、そこからはもうスローモーション。走って逃げてんだけど、後ろから冷たい空気がひやーっと来る。「やっぱいー」とか言ってたら、子供が2人が砂を掘って遊んでる。ほっとけないんでぐっとつかんで立ちあがろうとしたら、どっぱーんと波が来て、ドーンと流された。子供だけは離さないでふんばってた。1分くらいたったのかな、気がついたら砂浜に倒れてて、口と目と耳と鼻のなかは砂だらけ。まわりの音はなんにも聞こえない。そしたら片方の子が泣くんだね。みんなやってきて目の洗浄とかいろいろやってくれてなんとか助かったわけ。親も必死でわいわい言ってたね。オレは荷物全部流されちゃってとぼとぼ歩いてたら、きれいなねぇちゃんがシボレーのオープンカーから「ヒュー、ヒュー」とか言ってる。かっこいいと思われてたみたいね。そのあともレストラン行ったら、「お前知ってる」とか言って、タダにしてくれた。

翌日、アメリア・アイランドに行った。これはすごかったね。体浮いてんだよね。真っ白だから光が当たって足もとが見えないんだよ。あれほど青くてすごい海は見たことないよ。海底が白だから入道雲の上みたいな感じで。とにかく真っ白。で、あと見えるのは青だけ。天国を歩いてる感じかな。みんな足がないみたいな感じで、歩くのがゆっくりになっちゃう。そういうのを楽しんだ。

帰ってきて、やばいドライブインだから電話ないじゃない。で、インターネットやるためにカウンターまで行ったらインド人のおばさんがいた。一見、普通のおばさんなんだけど、超頭いいってのがよくわかったね。「どこから来たの」、「なんで旅してんの」、「なぜバイクなんだ」、「日本でもバイクに乗るのか」とか質問を浴びせてくる。しまいには「将来はなににになりたいんだ」って聞くから「ここに住みたいかな」って答えたら、「田舎は限界がある。自分の可能性を試すには都会のほうがいい」なんて言うのね。で、イ

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

Photo : Tokiwa Takehiko

戻って行くんだってのがわかるわけじゃん。それがね、いやなんだよ。1万何千キロも旅をして旅人になりきってる。それが急に戻されていく。そのつらさで、胸の中が空洞化しちゃった。で、涙があふれてくるんだけど、ヘルメットかぶってるから拭けないのね。

そんで、気が付いたらリンドバーグみたいにバイクに話しかけてんの。もう完全に人馬一体になってた。「お前なんかただの400キロ鉄の塊かと思ったけどよ」って言ったら、バイクが言うには『お前なんか75キロのただの肉の塊かと思ったぜ』って、そんな話をするんだよ。「お前はこれからどうすんだよ」って言ったら、『ほかのやつのっけてまた走るんだよ。そういうお前はどうすんだよ』、「オレは都会人になるんだよ」、『だれきった奴らと同じか』、「そうだよ。悪いかよ」、『いいけどさ』って。

翌日、ソーホーの友人の家にバイクを置いてセントラルパークまで25キロも歩いた。もうクロコダイルダンディーだよね。「けっ」ばっかり言ってた。ここは生命力を感じないとこだなって思ったよ。森とか海ってね、暖かいものがあるんだよ。生命感というか、あれがないなと思ったね。

次の朝、ヤマハの連中と落ち合って、2階建てのバスでマンハッタンをまわりながらインタビューを受けたんだけど、オレは気に入らないわけ。「観光バス？」大嫌いな都会をぐるぐるまわされて、日本人のサラリーマンにインタビューをされてる。まぁいいかって感じで。その中にヤマハの若い人がいたんだけど、ビスの付いた腕バンドして、いきなりわけのわかんない帽子をかぶってる。要するにニューヨーカーてのはそういうもんだと勘違いしてるのね。彼を見てたら最初にオレが海外に行ったときのことを思い出したね。22歳のころ香港に行ったんだけど、東京と変わんねぇと思った。でも、一日ごとに違いがわかってきて、あまりの違いに最後はびっくりした。そのあと、いろんな国を何十も行ってみて「世界は広いな」と思うようになって、今度アメリカ大陸1万キロ渡ってきて「オレが知ってたアメリカっていうのはニューヨークだけだった」って気づいた。ニューヨークはアメリカじゃない。全然違うよ。ヤマハの若い人と自分を比較して「オレは旅に出て鍛えられてるんだ、視野が広がってるんだ」ってことがよくわかった。

翌日、ヤマハのディーラーへバイクを返しに行った。バイクがトンネルに入ったら、エグゾーストノイズが壁に反響して、エンジン音の「ドドド」ってやつが「うぉんうぉんうぉん」ってなるわけ。「なに、お前泣いてんの」ってね。で、そのバイクで1万キロ走ったのは例がないからエンジニアがエンジンを見たいって言ってる。「お前はばらされるんだよ。まぁ、元には戻ると思うから見せてやれや」みたいな感じで。「次に乗せる奴には、オレはアメリカ1万キロ走ったんだって言ってやれよ」って。奴は『けっ』とか言ってた。

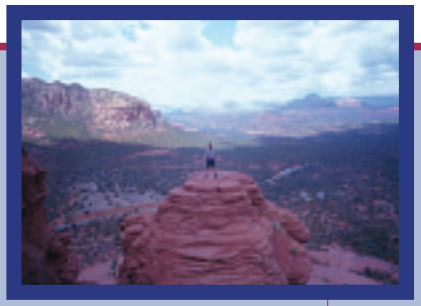
ディーラーに着いたら、むこうもバイクを愛する人の気持ちってのがわかるんだね。あっけらかんとして「心配すんなよ。きれいにしてやるよ」って言った。「さらばじゃ」って、奴が工場のほうに持ってかれた。で、姿消えたころに目に入ったのがフルチューンの真っ赤なGS 11。「ちょっと乗ってもいい」ってエンジンかけたら、一発で気に入っちゃった。あとでヤマハの人が「5分後に浮気する久保田さん」だって。

帰りもみんなと同じ車に乗ってマンハッタンを見るじゃん。彼らは日本や東京と比較したマンハッタン見てるけど、オレはアメリカ大陸の中のマンハッタンを見てるわけ。てことでジ・エンドかな。

「さらばいとしき相棒～旅の終わり」
New York is the lonely town

ンターネットにつなげたら「私もそれを始めようと思う。どうしたらいい。どうやって勉強したらいい」って聞いてくる。あれこれ教えたら真剣に聞いてて、「いつかはやろうと思ってた」だって。なんでも、アメリア・アイランドだけを特集したサイトがあるんだよ。そこにホテルの情報をアップしたいんだって。才能のあるインドから来た女性が不思議な島アメリア・アイランドで次のビジネスチャンスを狙って、人生の勝負に出ようってのがよくわかったのよ。これはすごいと思ったね。

「やっぱりオレがヒーローだったんだよ！」



結論として、ヒーローを探してる情けなさっていうのなんかもうどうでもいいやって。探してたぼくがまだ探してる人に言えることは、「足りないのはね、度胸だよ」ってこと。ヒーローがいたからどうなるってことではないと思うし、どうしてもヒーローを探すというならば、やっぱね、みんな個人、個人が誰でもヒーローになる時代だと思う。

とんでもないヒーローなんてもういない。とんでもないヒーローってのは情報がないころに指導力とか権力を持ってたシーザーとかジンギス・カンだとかケネディーだとか、ああいう人たちのことを言うんだけど、そういう超リーダー格の一人の人間が動かす世の中はもう終わってるよ。だから、ヒーローはもういらない。作られたヒーローは、もういないと思っていい。そういう意味からすると、じゃあ、あんたはこれからなにするのっていうことが問題なんだけど、答えは全部違う。でも、どうすればいいかはわかる。それはね「ワクワクしてること」が大切なんだよ。「ワクワクすること」をやればいい。それだけだね。

でね、21世紀、世紀末っていうけど、変わりゃしないよ。ノストラダムスなんてうそだったじゃねぇか。21世紀になったからって、そんなに変わるもんじゃない。50年たってもそんなに変わりゃしないよ。そんなことよりもね、「なにやろうかな」とワクワクしてる奴が、何年後かにキーウエストかなんかにいるんじゃないかと思うよ。

「ヒーローは誰だったのか？」
a veritable 21st century hero is you and me

インターネットマガジン／株式会社インプレスR&D
©1994-2007 Impress R&D

［インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ］ ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D（株式会社インプレスから分割）が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン　バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容（技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど）は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など）が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D（当時は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先
株式会社インプレスR&D
All-in-One INTERNET magazine 編集部
im-info@impress.co.jp

Copyright © 1994-2007 Impress R&D, an Impress Group company. All rights reserved.